



国際シンポジウムの舞台裏から

—スタッフブログ『太郎坊のそよ風』に連載した事務局のACPM2017 レポート—

※本稿は2018年1月9日から9回連続でスタッフブログに連載した同題名のブログからその一部を転載したものです。

11/6（月）臨時事務局の開設・Ice Breaker

東名御殿場からタクシーで9時45分会場の時之栖に到着。東京から発送した荷物をフロントで受け取って、ホテル1階の会議室に搬入、PC環境なども整え臨時事務局を開設。ここが以降5日間の司令本部となる場所だ。13時には畠山実行委員長、三浦、大河内両副委員長はじめ、実行委員（以下「委員」という）、アルバイトの学生等、予定の21名が顔を見せる。

全員の簡単な自己紹介の後、用意した『スタッフマニュアル』の要員配置計画にもとづき、本日を含む5日間の各スタッフの役割分担を説明。男子学生は説明もそこそこに、JR御殿場駅とJR三島駅にそれぞれ2名ずつ案内プラカードをもって出迎えに、残ったメンバーは参加者に手渡すコングレスキットづくり。机上に並べたプログラム集、パンフレット、記念品などを順番に集めて紙製のバッグに詰め込む。

臨時事務局の連絡用には、夏期観測で「山頂班」と「御殿場基地班」が使っている2つのケータイを用意してきた。実行委員の方々のケータイには、夏の観測の緊急連絡用にすでにそれぞれの電話番号が登録されているので何かと都合がいいからだ。

15時にはホテルロビーに登録デスクを開設。個々の参加者に手渡す領収書は、各自の名札ケースに挟み込んだ。名札ケースは名刺サイズも検討したが大きなハガキサイズにしたのは正解だった。

16時過ぎから三島駅、御殿場駅からのシャトルバスが到着するたびに、三々五々、海外からの参加者が降りてくる。ポーランド、タイ、台湾、…。長旅の疲れも見せず笑顔で登録を済ませてはチェックインもそこそこに次々とアイスブレイカーに加わっていく。



そのうち19時ごろ、手元の「山頂班」のケータイが鳴った。「Ian McCubbin」だ。三島駅に着いたところだがシャトルバスは発車した。駅前のバスターミナルの前にいる」加藤委員（首都大学東京）に相談し、車で迎えに行ってもらうことにし同乗した。

加藤委員にとっては初めて通る道、しかも夜道。30分の予定が40分以上もかかって駅北口のロータリーに到着した。中央あたりに立っている外国人らしき人物を見つけ、「Are you Ian？」と声をかけると、「THANK YOU！」とごつい手を差し出してきた。



三島駅から戻ったのは20時20分。すでにアイスブレイカーは終っており受付も閉めていたが、到着したばかりのIanの受付を済ませる。結局、この日登録を予定していた外国人22名のうち、

到着したのは19名、クロアチアの3名は現れず連絡も来なかった。翌日のバスツアーがやや気にかかった。

11/7（火）One-Day-Trip：晴れのち曇りでも満足のツアー

前日登録デスクに現れなかったクロアチアのSonja一行3名のことは、朝食のときに土器屋委員から聞いた。航空機トラブルでドーハ経由で17時間かけて羽田に着き、そのままタクシーで深夜ホテルに着いてチェックインしたこと。これでOne-Day-Tripの参加者は事前に申し込みしていた26人全員（外国人21名、日本人5名）がそろった。



ホテルロビーで和田委員（帝京科学大学）の点呼のあと、大型貸切バスで出発。行き先は『水の都』三島市の三島大社と柿田川湧水、伊豆フルーツパークでランチの後、箱根駒ヶ岳ロープウェーへ。ツアーの行程は担当の小林拓委員（山梨大学）と和田委員が事前に下見と味見をしておいていたという。

天気は午前中は快晴の上々の天気であったが、午後のロープウェーに乗る頃はあいにくガスって寒く、お目当ての富士山も見ることができず。それでも三島大社では神前結婚のカップルに遭遇し日本文化の一端に触れることができたり、参加者には十分楽しんでもらったとのこと。会議が始まる前に懇親を深める良い機会になった。

ホテルでは午後から会場担当の加藤委員（首都大学東京）と米持委員（埼玉県環境科学国際センター）が中心となって、1階会議室で企業展示とポスター会場の設営にとりかかる。協賛企業は11社のうち展示するのは9社。ポスター発表は34件。会場スペースは十分で、余裕をもったレイアウトができた。



一方、翌日から始まる口頭発表会場となる『さくらの間』も事前に確認することにしていたが、会場は遅くまで使われていた関係で待たされ、中に入ることができたのは19時過ぎになってからである。「あべ静江のトークショー」があつたらしい。

実行委員とスタッフ10数名で、横断幕の位置や発表者の登壇場所などを30分ほどかけて入念にチェック。このとき天井備え付けのプロジェクターを確認しなかったのは、うかつだった。翌朝の口頭発表が始まる前にこれでひと騒動が起きようとは、想像もしていなかった。



11/9 (水) Welcome Address / Oral Session

この日から『さくらの間』を会場にテクニカル・プログラムの口頭発表に入る。それに先立ち、午前9時から開会のセレモニーが行われ、実行委員長の畠山史郎・NPO理事長と、開催地を代表して静岡県環境衛生科学研究所の杉山浩一所長がご挨拶。

実はこの間、舞台裏では発表に使用するプロジェクターの解像度に問題があることがわかり、その対応に追われていたのであるが、これについては巻末のコラム「窮地を救ったプロジェクター」を参照いただきたい。



講演は7つのセッションに分け、初日のこの日は3セッション17件の発表が行われた。

- | | |
|-----------------------|----|
| A) 山岳域の気体観測 | 7件 |
| B) 山岳域のベースライン観測 | 5件 |
| C) 山岳の惑星境界層及び輸送モデル | 5件 |
| D) 山岳のエアロゾル観測 | 9件 |
| E) エアロゾルの光学的厚さとその他の性質 | 3件 |
| F) そのほかの山岳大気関連の研究 | 3件 |
| G) 山岳域の霧/雲、降水及び露の化学 | 9件 |

11/10 (木) Poster Session : 会場への誘導策はサンドイッチ

朝起きると部屋の窓から見える富士山の頭に雪！前日のランチのとき、御殿場在住の小林喬夫・福井大学名誉教授が「今日の気温、湿度からすると明日の朝は富士山は雪になる」と予言されていたところになった。会期中に夏冬の両方の富士山を見る能够なうて、今回の参加者はラッキーだ。

今日は9時から口頭発表、16時からはポスター発表・企業展示、18時からはバケットと盛り沢山のイベントが用意されている。研究者も、昨晩遅最後のひとりが到着したことでフルメンバーとなり、参加者数は約100人と会期中で最大となる。

口頭発表は2日目。会場もぎっしりと埋まり奥の壁側には補助椅子も並べられた。8時40分から15時まで15件の発表があり、活発な意見交換が行われた。

ポスター SESSION 会場となる1階会議室はホテルの東端にあり、西端にあるオーラルセッション会場の『さくらの間』からは、ホテルの端から端まで移動しなければならない。会場の位置関係としては最悪で不便この上ない。

実行委員会でもこのことは問題になっていた。ポスター会場への誘導対策として、ランチの弁当 BOX (サンドイッチ) と飲み物はわざわざポスター SESSION 会場前のロビーの前に机を置いて、そこに取りに行ってもらうようにした。



誘導策の効果についてはともかく、弁当を食べるときはロビーやラウンジ、事務局の部屋など、それぞれ思い思いの場所を使ってもらった。サンドイッチのボリュームに関しては、申し分なかった。

ポスター SESSION は全部で33件の発表があった。学生発表者に対しては学生賞を審査するため審査員となった研究者が忙しく質問して回っていたが、それでも全部は回りきれなかったという方もいた。惜しまらくは時間が短すぎたようだった。

ポスター SESSION が終わった後、桃井裕広さん（東京理科大学生）が「海外の国際会議にもポスターを出したことがあるが、外国の研究者からこんなに熱心に質問を受けたのは初めてだ」と手応えを感じたらしく感激した面持ちで話してくれた。身近で海外の著名な研究者と討論ができるのもコンパクト国際会議ならでは、ではなかろうか。



11/10 (木) Banquet : George Lin 先生のこと

パンケットは18時から2F宴会場『ふじの間』で、宴会担当の皆が委員（石川県立大学）と勝見委員（同）の司会で賑やかに始まった。畠山実行委員長の挨拶に続いて乾杯の音頭で壇上に立ったのは George Lin 教授（台湾）。

「前回アメリカの Steamboat Springs での会議で、次の会議は日本か台湾で開催することに決まっていました。しかし Mt.Fuji は（台湾の）Mt.Lulin より1千㍍も高いので、今回は日本にやつてもらうこととしたのです」とユーモアたっぷりにスピーチ。（*1）

Lin 先生は台湾中央大学の教授で、ACP の最初の立ち上げにも関わっており、今回も International Advisory Board として助言をしていただいている。



NPO のスタート時からマウナロアの Russ Scnall 博士と一緒に応援して下さり、2006-7年のNPO主催の3回の国際集会での講演、台湾の Lulin 山 Baseline Station との共同研究など、富士山測候所を活用する研究面で絶大なサポートをしてくださった。

2014年6月に畠山理事長（当時は東京農工大学教授）の招聘で東京農工大学のスーパー教授（Distinguished Professor）として来日された時にも、わざわざ NPO のために講演をしてくださいました。

その時点ではまだ日本での開催は決まっていなかったが「次の ACPM は日本で開催すべきだ。NPO のためにもやったほうが良い」と、NPO の主だったメンバーに熱心に説いておられた。外から NPO のことを気にかけてくださっている一番の良き理解者である。

今回、このような形で日本で会議が開催できたことを一番よろこんでおられるのは Lin 先生なのではなかろうか。

(*1) 富士山の標高：3776㍍ Lulin 山の標高：2682㍍





11/10 (金) Closing : "The conference was very well organized and everything was going smoothly"

最終日を迎えた。2F『さくらの間』の前の受付デスクには、最後の事務に即応できるよう1F臨時事務局に置いてあったプリンタを運び出した。領収書の発行や帰りの電車の乗り継ぎダイヤの作成・プリントなどその場で対応できるようにするためである。

朝の発表が始まる前、Martine(スイス)が「さくらの間」のロビーで加藤委員に何やら相談していた。「会議が終った後にちょうどいいバスがないので早く帰るという人がいる。何とかならないか」ということのようだ。

調べてみると、会議が終るのは12:30であるが、三島駅行きのシャトルバスは確かに14:00までない。その前のバスは12:00発なので会議はまだ終わっていない。ホテルの営業部長に相談し、12:45に三島駅行きの臨時便を出してもらうことになった。

前日のバンケットを最後に帰った研究者もいて、最終日はところどころ空席も目立つようになった会場では、午前中の最後のセッションをもってすべての発表を終了した。

引き続き、閉会セレモニーが行われた。今回のシンポジウムでは優秀な研究をした中村恵/早稲田大学、桃井裕広/東京理科大学、Ghislain Motos(スイス)の3名が表彰された。

次のシンポジウムは3年後2020年にヨーロッパで開催されることになっており、開催国は今後決定がなされる予定であるが、ポーランドの研究者から飛び入りで立候補の意思表明と開催予定地を紹介するプレゼンテーションが行われた。



最後に、第1回シンポジウム開催者でもあるJohannes Staehelin教授(スイス)がClosing Remarksで "The conference was very well organized and everything was going smoothly." と会議の成功を褒めたたえたうえで、会議の計画と運営にあたった実行委員会に対して感謝とねぎらいの言葉があった。

臨時シャトルバスのニュースは会場で加藤委員がアナウンス。その前にポツリポツリと会場を抜け出て帰る人もいたが、12:45発の臨時便はほぼ満席のACPM関係者26人を乗せてホテルを出發した。残った実行委員や学生スタッフは8Fのレストランで昼食をとり、それぞれ14:00発のシャトルバスや車で帰路についた。

エピローグ

会議には12の国・地域から101人が参加した。このうち研究者・学生は77人(日本47人、海外30人)。世界中でこれだけ多くの研究者が山岳で研究・観測を行っており、また、国内でも富士山以外にも、丹沢、立山、八方尾根など多くの山々を研究観測のフィールドにしていることを知ったのは新鮮な驚きであった。

テクニカルプログラムは5日間の会期のうち実質的には3日間であったが、研究成果の発表と討論を通じて、またセッションの合間合間に設けられたコーヒーブレイクなども活用し、十二分な意見交換が行われて所期の目的を達成することができたのではなかろうか。

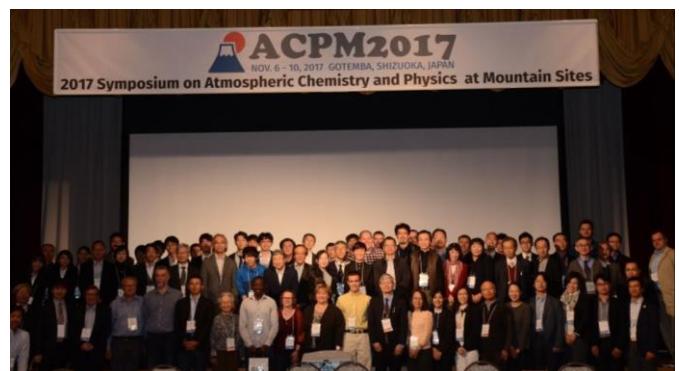


講演に関しては事前に作成したプログラム集にある口頭発表は41件、ポスター発表に関しては1件を除く33件がすべて予定通り行われたが、国際会議では極めて稀なことらしい。直前の出席キャンセルなどに対して柔軟にプログラムを練り直した長田・矢吹両プログラム委員の尽力に依るところが大である。また、広報委員がAnnouncementやReminderをこれでもか、これでもかとメール発信し続けたことも参加者の定着率向上に寄与したことにつながったと思う。

会議の準備段階ではウェブサイトの不備や問い合わせに対する初動遅れなどで、少なからぬ海外からの参加者にご迷惑をおかけした。今後の反省材料としなければならないであろう。一方、会議の当日運営に関しては、多少のトラブルは発生したもの、会場委員がホテルや東部地域コンベンションビューローの協力を得て迅速に対応し、その影響を最小限にとどめることができた。

全体的には、参加者から「家族的な」「convivial(陽気な)」といった声が聞かれた。同じ会場で5日間通して顔を合わせていたことで、初対面なのにずっと前から知り合いのようなとても打ち解けた雰囲気であった。100人という規模ならでは、だったのではなかろうか。

このような国際シンポジウムを運営したという実績は、その中心となったNPO法人にとって新たな前例を作ったともいえる。これにかかわったメンバー、特に若手研究者や学生には、この経験を財産にし、自信につなげるようにしてもらいたいものである。



新年早々の1月3日、Johannes Staehelinから土器屋委員あてに「次のACPMの準備に着手するためACPM2017のウェブサイトを見ようとしたがアクセスできない(?)。会議プログラムと参加者リストを送ってもらえないか」という依頼があった。

3年後、2020年の第4回ACPM開催に向けた準備の動きは、すでにヨーロッパで始まった。ACPMと山岳域における大気化学・物理の研究がさらに発展することを願っている。

(*) ACPM2017公式ウェブサイトは現在は以下のURLで参照できる。
http://npo.fuji3776.net/acpm2017_website_clone/acpm2017.jp/index.html